莎草研究 No. 26: 1−9 (2024).
J. Jpn. Cyperol. (26): 1−9 (2024).

【追悼】

小山鐵夫先生を偲ぶ（1933–2024）

藤川和美
（高知県立牧野植物園 〒781-8125 高知県高知市五台山 4200-6）

Kazumi FUJIKAWA: In memory of Dr. Tetsuo Koyama (1933−2024)

(The Kochi Prefectural Makino Botanical Garden, Godai-san 4200-6, Kochi-shi, Kochi 781-8125, JAPAN)

2024 年 4 月 19 日、高知県立牧野植物園の名誉園長であった小山鐵夫先生が、敗血症のために享年 90 歳でご逝去された（図 1）。植物分類学者としての業績とともに、高知県立牧野植物園がリニューアルオープンした 1999 年より、15 年の長きにわたって園長を務められ、植物園の充実と発展のため多大な貢献をされた。

図 1. 小山鐵夫先生（1933−2024）.

小山先生は、少年期より草木の観察が好きで、牧野富太郎博士へ「先生のお弟子にしてもらいたい」と書いたお手紙に写生図や記載文いれて送付されてから、牧野博士との交流を通じて植物分類学の道に進むことを決意したと語られている（図 2）。1952 年に東京大学理学部に入学され、1961 年に理学博士を取得。東京大学助手を経て渡米し、1961 年にカナダ農務省中央研究所、1963 年からアメリカニューヨーク植物園で 30 年近くにわたり、

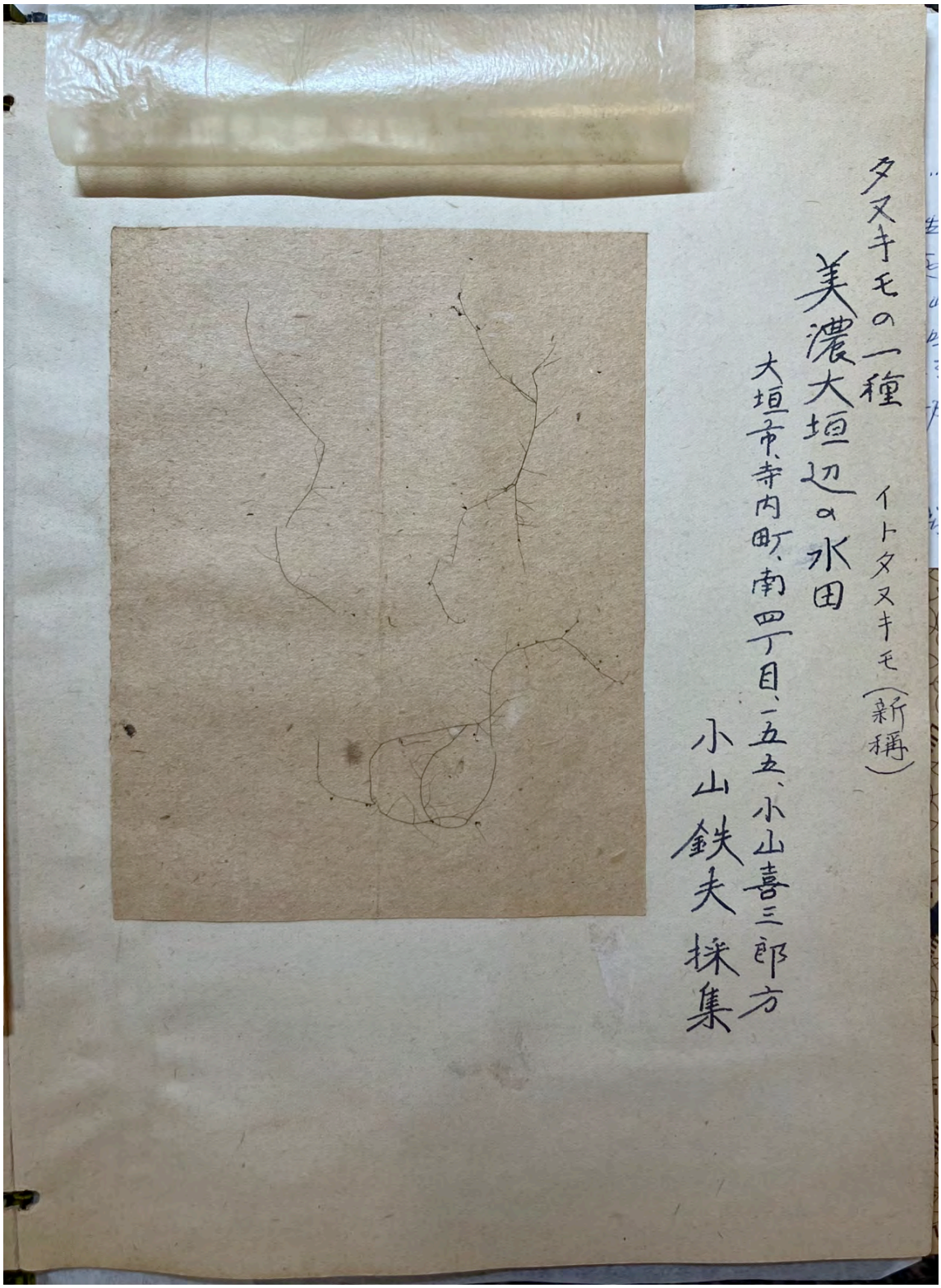

図 2. 疎開していた大垣から牧野博士に送った標本（牧野植物園所蔵）．牧野博士は「イトタヌキモ（新称）」と記している．

植物分類学者としてカヤツリグサ科やサルトリイバラ科のモノグラフ研究や、各国の植物誌編纂事業に携わり、ニューヨーク植物園首席研究官・アジア部長を務められた。また、資源植物学の分野を確立し、資源植物を求めて南米やアジアなど世界各地で調査を行い、応用研究に資する有用植物の研究を推進した。さらには、大井次三郎著『日本植物誌』(1953年刊)を英訳して1965年にアメリカのスミソニアン研究所から「Flora of Japan」の出版(1984年に再版)に尽力し、当時あまりよく知られていなかった日本の植物を世界に紹介した。1975年10月には、ニューヨーク植物園を訪問された昭和天皇へ、植物・資料の解説、日本人代表としてご案内を務めるなど、日本とアメリカのかけ橋となった。また、日本国外務省国連代表部代表顧問も務められていた。

日本に帰国後の1988年から日本大学農獣医学部教授、のち同大生物資源科学部教授となられた。1996年、牧野博士に直接指導を受けた直弟子であった小山先生に、牧野植物園の整備事業総合アドバイザーが依頼され、1999年に園長に就任。植物園の認知度と水準を高めるため、研究活動を推進し研究型植物園としての基盤を固めるとともに、魅力的な観光施設となるべく園地を整備して、総合植物園としての礎を築いていった(図3)。2014年に園長職を退き、県立牧野植物園の顧問・名誉園長となり、退職後は沖縄美ら島財団研究顧問として研究室を沖縄に置き、西表植物誌などに携わった。2017年には、植物学分野で長年にわたる国際機関活動および日米友好親善の功績が認められ「瑞宝中綬章」を受勲した。

図 3. 魅力的な園地へ向けて新温室がオープンした牧野植物園(2010年4月24日撮影).

高知県立牧野植物園での小山先生

牧野植物園における小山先生の功績で特筆すべきは、ミャンマーをはじめ、ボリビア、ソロモンなど海外の植物調査を始動させたことである。世界に認知される植物園になるに

はと、国際的な繋がりを最大限に活かし、鎖国状態であったミャンマー森林省と 2000 年に協定を結び、30 回以上に及ぶ植物調査隊を派遣、相手国側の持続可能な遺伝子資源の利用や人材育成に貢献するとともに、多数の植物標本や試料を日本に持ち帰ることを可能にした（図 4）。現在までにミャンマーで採集された腊葉標本は 3 万点以上になり、世界に誇る一大コレクションになっている。小山先生は園の運営を精力的に進める傍ら、ミャンマーから採集されたカヤツリグサ科およびサルトリイバラ科の研究を精力的に行い、新種 11 種を命名・記載した（図 5）。ミャンマーでの生物多様性解析と資源探索研究は、国際協力機構（JICA）「草の根技術協力事業」の受託など海外開発援助活動への精力的な取り組みにもつながった。また、教育者として、次世代を継ぐ植物分類学者の育成に力を入れるだけではなく、子ども向け絵本の執筆や植物愛好家向けのセミナーなどにも力を入れ、子どもから大人まで幅広く植物知識の普及に尽力された。

図 4. ミャンマー環境保全・林業省（現天然資源環境保全省）との連携協定延長の調印式（2012 年 10 月 29 日撮影）.

研究や教育普及活動の推進と同時に、諸外国の関係者とも積極的に交流を深め、多くの海外からの要人が植物園を訪問した。2011 年にはシンガポール植物園で牧野富太郎博士の植物図や資料を展示する企画展を開催し、トニー・タン大統領へ植物園の取り組みについて精力的に説明された（図 6）。また同年には、「日米桜寄贈 100 周年関連事業」として、小山先生のアドバイスのもと高知県からハワイへ寄贈した‘仙台屋’など桜の育成・管理に関して指導を行い、本事業は現在も植物園で連携して続けられている。

図 5. ミャンマーから見出されたスゲ属の一新種 *Carex matsumotoi* T. Koyama（Mitsuo Matsumoto no. 088451, 26 Apr. 2012, MBK0263604）.

そして、研究活動の基盤が整いつつあるなか、開園から 50 年を経た南園では、2008 年に大幅リニューアルを行い、近隣の四国霊場第 31 番札所五台山竹林寺との景観を保つよう東洋の伝統園芸植物が観賞できる「50 周年記念庭園」を完成させた。春には盛大なフラワーショー「五台山花絵巻」、秋には菊花展などを開催、2010 年には、より一層の魅力的な観光施設となるよう老朽化した温室を建て替えた。このように整備された植物園は、①植物学の研究を発展させ（研究）、②植物知識を伝え（教育普及）、そして③植物と共に暮らす幸せを共有する安らぎと憩いの空間の提供（観光）という機能を備えた総合植物園としての基盤が築かれていったのである。

図 6. シンガポール植物園にてトニー・タン大統領に解説をする小山先生.

植物分類学研究

植物分類学の研究では、カヤツリグサ科やサルトリイバラ科を中心に、小山先生が発表したカヤツリグサ科の新分類群は約 260、サルトリイバラ科では約 25 分類群で、さらに分類学的位置など体系的な研究成果として発表されたカヤツリグサ科の学名の組み替えは約 420 分類群にも及ぶ。このうち、スゲ属では約 90 の新分類群を発表している（International Plant Names Index (IPNI)よりデータを抽出）。

牧野富太郎博士は植物図の名手として知られるが、小山先生もまた優れた植物図を描いた。青年時代に牧野博士に送った図が「牧野文庫（牧野博士の蔵書、遺品類を所蔵する）」に残されている（図 7）。増補版牧野日本植物図鑑の原図を描いたことでも知られているが、自身で「私は画家の家に生まれたので、絵や写生図を描く事や所謂「絵心」は遺伝的に天才として恵まれて居て、好きでも有ったので～（以下略）」と述べている。上述の 1965 年に英訳された大井次三郎著「Flora of Japan」の挿入図キク科メタカラコウなどから、小山先生はたいへん画才があふれる方であったことがわかる。

図 7. 青年時代の小山先生が牧野博士へ送付した頂生するアサガオの写生図（牧野植物園所蔵）．昭和 23 年 12 月 4 日付で牧野博士に送ったことが記されている（描いた時は 8 月 12 日とあり、小山先生は 14 歳）．

終わりに

終わりに小山先生を偲んで、思い出を綴らせていただきたい。

わたしが小山先生に初めて出会ったのは 2003 年、牧野植物園が研究型の植物園として始動したころ。採用試験である。午前中の植物分類学、英語とラテン語の筆記試験。ラテン語の試験というのも小山先生らしい。大井次三郎博士の記載文であったと記憶している。試験を終え、いざ面接へ。ノックをして部屋に入り着席すると、小山先生は微笑み，英語で話かけてきた。とっさに「日本語で回答してよいか。」とたどたどしい英語で答えると、「英語で答えてください。」とやはり英語で返ってきた。青年海外協力隊あがりだったことで採用されたと思っているが、研究員は外国語を流暢に正しく話す、書くことができるが大前提という中、語学力不足で度々小山先生を困らせてしまった。「僕はね、ニューヨーク植物園では、英語を母国語とする学生の文法を直していたんだよ、ぐふふふ。」とお話しされていた通り、小山先生ご自身が英語はもとよりラテン語、フランス語、スペイン語を操り、中国語、シンハラ語等々を理解されていて、東京大学の学生時代、ラテン語の授業では講師より堪能であったそうである。これら語学力の重要性に加え、海外との交流では“APPRECIATION”をもつことを大切にされていた。“APPRECIATION”には感謝の意とともに、相手の価値観を認め、また認められる関係性を構築する意が含まれていたのだと思う。

小山先生の口癖に「牧野先生は“植物”が好き。僕は“植物研究”が好きなんだ。」と根っからの研究好きであった小山先生は、植物園の研究室にはいつも標本を積み上げ、時間を見つけては顕微鏡をのぞかれていた。コロナ禍以降、ご自宅があるハワイに戻られずに、また心筋梗塞となった後にはご療養もあり東京で過ごされていた間には、「樹木の形態についての論説を頼まれてね。だけど標本が手元にないんだ。植物園から標本を何点か送ってほしい。」と、度々標本借用のリクエストがあった。「植物図が描けなくなったから、植物画家を紹介してほしい。」とも。これら随筆は『林業と薬剤』（https://www.rinyakukyo.com/sp/forestry.php）に掲載されている。なお、『林業と薬剤』には、“牧野富太郎先生の事”（上下の 2 つ）と題したエッセイが、2023 年 12 月（246 号）と 2024 年 3 月（247 号）に掲載されており、本題下の牧野先生との出会いは小山先生らしい内容となっている。ところで、小山先生が若い頃にはその年に発表した論文の数をアルファベット a から z を超える数執筆することを目標に据え、同僚と競い合ったそうである。「僕は書いたよ、ぐふふふ。」と語っておられた。それら数々の論文は、至って“シンプル”、簡潔で体系的である。“牛の小便の様に長い”と東京大学で言われた牧野博士の記載文とは対象的であったが、牧野富太郎博士が好きを貫いたと同様、生涯現役を貫かれた小山先生の研究人生であったと思う。

無理筋でも切り開こうとするタフ・ネゴシエーターであった小山先生。粘り強さと巧みな交渉術、太いパイプを持ち、破壊力を持って何事も成し遂げていった。褒め上手でもあって、これは恐らく、普段からその人への観察をじっくりしていたためではないかと思われる。植物を観察する優れた才が、人物観察にも発揮されたのではないだろうか。まなざしの鋭さで思い出すのは、緒方貞子氏（当時 JICA 総裁）が植物園に視察にいらした際、お二人とも口元は微笑み、目が笑っていなかった。これは真剣さと緊張した空間であったことからの印象であって、“鋭い眼光”という意味である。お二人とも多様性を認識して理解し、尊重された方であった。

小山先生には、90 年の長きにわたり植物分類学者としてカヤツリグサ科のモノグラフ研

究をはじめ、ミャンマー、中国、台湾、タイなどアジア各国および新大陸の植物多様性を解明し、また植物園園長としてその経営におけるご尽力に改めて感謝の意を表したい。ここに深く哀悼の意を表し、小山先生のご冥福をお祈りする。

【経歴】

1933年10月9日東京都港区生まれ。東京大学理学部卒。東京大学大学院生物系研究科博士課程修了。理学博士。東京大学理学部助手（文部教官）、カナダ農務省中央研究所研究員を経て、ニューヨーク市立大学教授・ニューヨーク植物園首席研究官兼アジア部長。この間、デンマーク国立オールフス大学客員教授、国立台湾大学客員教授、インド・バラティアール大学博士学位試験官、国際機関アジア蔬菜研究発展センター理事、外務省国連代表部代表顧問等を歴任。帰国後、日本大学生物資源科学部教授・資料館長、（財）高知県牧野記念財団専務理事・高知県立牧野植物園園長、高知大学理学部客員教授、琉球大学農学部客員教授、（財）日本生態系協会理事、（財）日本植物園協会評議員、（財）日本花の会理事、（社）園芸文化協会研究顧問、UNESCO新熱帯植物調査機構評議員、中国安徽省合肥植物園顧問、日本研究植物園連合会長、米国公益法人ハワイ桜基金理事長、日米桜寄贈100周年関連事業「全米桜植樹プロジェクト」ハワイ地区の桜植樹アドバイザー、ハワイ・ホノルルビショップ博物館アソシエート、一般財団法人沖縄美ら島財団総合研究センター研究顧問。

専門分野：植物分類学、資源植物学、植物園学。

国際開発計画やフィールド調査のエキスパートや隊長として、スリランカ、タイ、インドネシア、中国、台湾、ミャンマー、ベネズエラ、ブラジル、コロンビア、ペルー、太平洋島嶼国等への駐在、訪問した経験が多い。

【受賞歴】

「第 21 回松下幸之助花の万博記念賞」、「ハワイ州ホノルル市郡議会感謝状」、「日米桜寄贈 100 周年外務大臣表彰」、「台湾植物分類学会終身貢献賞」「瑞宝中綬章」など。

【主な著書】

『資源植物学』（講談社）、『資源植物学フィールドノート』（朝日新聞社）、『黒船が持ち帰った植物たち』（アボック社）、『植物園の話』（アボック社）、『生物資源アクセス』（東洋経済新報社）、『花と木』（誠文堂新光社）、『花と緑を求めて』（東急エージェンシー）、『発見！植物の力』（小峰書店）、『東亜イネ科植物誌』（英文）（講談社サイエンティフィク）、Cyclopedia of Food Plants and Food Technology (Academic Press、共著) 、 Grasses of Japan and Its Neighboring Regions (Kodansha)、 History and Principle of Traditional Floriculture in Japan（Aboc）他、学術論文 300 余篇。

なお、本稿の前半部分の内容は牧野植物園出版『やまとぐさ』に掲載されている小山先生への追悼文（小松ほか 2024）を加筆・修正したものである。

小松加枝・藤川和美・川原信夫 2024. 追悼 小山鐵夫名誉園長を偲んで. やまとぐさ (5): 1−4.